

## 素晴らしい絆で咲いた酪農後継者の樋口貴明さん

古好 秀男

ことの起りは、岡山県北の蒜山で酪農経営を営んでいた樋口貴明さんの、お父さんが急病で倒れたことから貴明さんの酪農後継者の志が芽生え始まったのです。樋口貴明さんは当時15歳の中学生で、将来、何処の大学に進学するのか進路について悩み、苦しんだ壮絶な心の格闘がある中で、お父さんの酪農に対する夢を継いでほしい願望を胸に、硬い決意を持って酪農技術習得をするために財団法人中国四国酪農大学校に進学され、苦境を乗り越えて今日、見事に素晴らしい酪農後継者を継承された経緯について紹介します。

お父さんが平成11年12月にお腹が痛いからと言って、病院へ精密検査を受けに行かれたのです。奥さんが病院側から呼び出され、“奥さん”気を確かに持って聞いて下さいと言われ、受診の結果は最悪の進行ガンと診断されたのには驚いたのです。さらに追い討ちを掛けるように、すでに腸閉塞を起こしているので腸の患部を切断して繋げる大手術となるが、寿命は後1年だろうと宣告された本人は、家族のこと、酪農作業の現状・将来の酪農経営のこと等複雑な心境だったに違いありません。奥さんは、ご主人の入院に至る病状の状況説明を受けた時には、これは大変だと悩んだ末、ご主人には、ガンであることは、大手術が済むまでは伏せておきましょうと医師から言われていたので、奥さんが一人で医師から説明を受け、その後、大手術が終って落ち着いてから、ご主人には、医師からガンであることを伝えたのです。ご主人は切羽詰まった酪農作業の現状、将来の酪農をどうするかについて奥さんに相談されたのです。まずは現状の酪農を維持するために、ホクラクへ酪農ヘルパーを要請したのです。酪農経営を

維持するためには、今後の酪農経営に関する作業を奥さんが一人でしなければならない不安と通院してご主人の看護、家族の生活・将来の子供の進路等で頭の中が一杯で壮絶な心の戦いの毎日で疲れがピークに達していたのです。

それでも治療をしている内に、ご主人の病状もある程度安定して来たので、病院に外泊許可をもらって一旦我が家に帰り今後の酪農経営継続について随分時間を掛けて奥さんと話し合ったのです。ご主人が丁度入院された時期と同じ平成11年11月に大きな夢と希望を抱いて、カナダからジャージー牛3頭を輸入して、飼養頭数35頭の搾乳牛を整備して酪農経営に意欲を燃やしていたのです。しかし病氣となった以上、十分な育成管理が出来ないことから奥さんと話あった結果、導入した3頭の育成牛は、蒜山の酪農家に引き取ってもらい、我が家の育成牛も蒜山酪農組合が経営している育成牧場に預けることにしたのです。

息子の貴明さんも中学校を卒業して、地元の蒜山高校に入学するまでの1ヶ月間ほど、お母さんの酪農作業の手伝いをしたこと、酪農ヘルパー傷害事業を2ヶ月間採択出来たお陰で、奥さんも不安であった酪農作業にも随分慣れて、一人でやれる自信もついて来たので本当に助かったのです。

ご主人も開腹手術をうけたが、思っていたより病状が進行していることがわかり、病院側から最悪の場合は後3ヶ月ほどの寿命と無情にも宣告された時には、この世には神も仏も無いものかと、言葉では表現できない残酷でむなしい気持ちで本当につらい思いだったのです。

奥さんは、様々な用事を済ませては、病院に介護に出向き、ベッド上で苦しむご主人に酪農

を辞めようと話しかけたが、意識がなくなる4～5日前に病院のベッドの上で「わしゃあやめんぞ!」、「わしゃあやめんぞ!」、「息子にやって欲しい!」、「酪農大学校に行って技術を習得して、本格的に酪農をやって欲しい。」と喘ぐように言ったご主人の息子を見る目は誰よりも輝いていたのです。

ご主人が情熱的に息子さんに酪農をやらせたいというので、取りあえず奥さんは、ご主人の命のある限り酪農を頑張ろうと思ったのです。ご主人の血圧が下がり段々と意識がなく昏睡状態となり、どうすることも出来ないもどかしさの中で、懸命な介護にも係わらず平成12年3月23日に帰えらぬ人となりましたが、ご主人は、自分の夢が果たせなかったことが本当に残念で「そりゃあ」悔しかったと思いますよ。と奥さんは、ご主人の胸の内を懐かしそうに回想されました。

奥さんは、とことん考え悩んだ末に、ご主人の壮大な夢であった酪農を継続して行くことが、ご主人に対する最大の供養だと思い、息子さんが高校・酪農大学校を卒業して後継者になるまでの5年間、歯を食いしばって何が何でも頑張ることを決心されたのです。恐らく息子は高校の先生から、将来の大学進路指導の時には、北海道の大学を進められていたと思いますが、最終的には近所にある財団法人中国四国酪農大学校に進学することを本人が決めたのです。酪農後継者になって5年が経過する今日、飼養頭数では搾乳牛35頭、乾乳牛5頭、育成牛10頭の計50頭の飼養頭数となっています。平成12年にお父さんが亡くなり搾乳牛25頭に減らして酪農経営をしていた当時よりも苦境を乗り越えて、25頭も増頭して頑張っていることは、何よりも素晴らしい酪農後継者だと思います。

酪農経営の他に貴明さんは、今日、真庭新農業経営者クラブ連絡協議会の副会長として活動しておられ、新鮮で栄養豊富なジャージー乳製

品を消費者に理解をして頂くために、今年8月2日にも蒜山ジャージーランドでイベントを計画していると張り切っておられます。

お父さんが貴明さんに酪農経営の夢を継いで欲しい願望と、お母さんがお父さんの意志を継いで酪農経営を継続して守り、貴明さんが高校・酪農大学校を卒業するまでの5年間、歯を食いしばり、粘り強く頑張り抜いたこと、更には、貴明さんがご両親の期待に答えた等、3人の強い「絆」が見事に咲いて、今日の素晴らしい樋口家の酪農後継者を立派に継承されたのです。

奥さんは、本当に苦しかった5年間を頑張りぬ抜くことができたのは、蒜山地域の酪農家の皆さんや地元の皆さんの温かい励ましを始め、組合・酪農関係機関の方々に支えられたことを心から感謝しています。と牛舎の愛牛を見ながら瞳を輝かせて、しみじみと話しておられました。最後に樋口家の益々のご繁栄と樋口貴明さんが将来に向けて地域のリーダーを兼ね備えた素晴らしい酪農指導者となられることを陰ながら祈っています。